Fore Please／世界ゴルフ

識聞録

ゴルフビジネスのプロが30年以上回って見て聞いて感じた世界のゴルフ文化をお伝えする新連載。第二回は各国のゴルフコンペのお話です。

Vol.2 ゴルフ文化はかくも違う

攻撃的なプレーを引き出す欧米で主流のコンペ方式があった。

ランチのある日本方式。スループレーが基本の欧米。

ゴルフは、自分でスコアを記入する個人競技であるとともに、一緒にラウンドをしているプレーヤーに対してもマーカーとして責任を持ちます。競技ルールを守るだけでなく、相手に対するマナーも重視されるユニークなスポーツです。前回のマスターズでも、緊張感溢れるプレーオフの最中にアンヘル・カブレラがアダム・スコットの良いショットを称え、アダムもそれに親指を立てるサインで応えた一場面は記憶に新しいですね。

さて、我々アマチュアゴルファーの場合、同じゴルフであっても、プレーをする国や環境が違うことで全く違うスポーツではないか、と感じてしまうケースもあります。セント・アンドリュースのような、スコットランドなどに多いリンクスコースでは、海岸に位置するために海からの風を受けやすく、ここでのプレーは気まぐれな天候との戦いでもあります。それでも日本ではどう考えてもラウンドを諦めてしまうような雨や風の中セルフでバッグを担ぎ、一人でラウンドをしているゴルファーを必ずと言っていいほど見かけます。修行僧のようなその姿を見ながら、これもゴルフの1つのあり方なのだと身が引き締まるのです。

アメリカに舞台を移しますと、マスターズが開催されるオーガスタ・ナショナルではメンバーの数をはじめ多くのことが公表されていないベールに包まれた一面があります。一方で、最高のプレーができるように、芝にとって厳しい夏の期間をクローズしてコースのメンテナンスをし、春のマスターズを迎える姿勢もいわば究極のゴルフです。

日本では、バブル崩壊後に投資目的で販売されていたようなゴルフ場の会員権が暴落したり、資金繰りができなくなり銀行が介入するなど、ゴルフビジネス以外でおかしなことになりましたが、接待ゴルフの流れは今でも続いています。関東ではハーフターンでは必ずクラブハウスに戻り、ランチを食べる時間が取られていたりします。私の地元の名古屋近郊のゴルフ場では、基本的にはスループレーで、ハーフターンでは茶屋で名物の「きしめん」を頂いてプレーを続けます。

大叩きホールは0点。ステイプルフォード方式。

プレーやコンペの楽しみ方もお国柄が顕著に表れます。日本での、仲間や会社関係のゴルフコンペの場合には、一般的にダブル・ペリア方式でハンデを算出して順位を決めるなど、エンターテインメント性の高いやり方が多いです。それに比べ、海外ではステイプルフォードポイント制が主流です。イーグル、バーディー、パー、ボギー、に対してポイントが与えられてそのトータルスコアで順位を決める場合が多いのです。大叩きしたホールはギブアップすれば0点で済むわけですから、ホール毎にチャンスがあり、攻撃的なプレーができるメリットもあります。

昨年の8月にジュネーブゴルフクラブでヨーロピアンツアーの一つとして開催されているロレックストロフィーに参加させていただく機会がありました。プロアマとはいえ、なんと3日間もラウンドするという本格的なものでした。最初の2日間は事前に決められたプロと一緒に回り、最終日は順位で決定されたプロとラウンドしましたが、申請したハンデを元に3人のアマチュアとプロという組み合わせで、トップ2名のベストスコアを争う大会でした。チーム戦ですので、プロは別としてもアマチュアは、3人のうちの誰かがネットでバーディーを取るチャンスもあるので盛り上がりました。娯楽的要素はありつつも、ゴルフがアマチュアにとってもタフなスポーツとして問われているような気がした、新鮮な3日間でしたね。

ゴルフビジネスのプロフェッショナル

神野方仁（じんの・みちひと）

1956年生まれ。テレ・プランニング・インターナショナル株式会社・代表取締役社長。国内外の様々なスポーツビジネスに関わり、中でもゴルフはマスターズのようなメジャー大会からジュニアゴルフに至るまで、イベント、放送、広告、マーケティングなどの面に長年携わっている。日記を公開中　Fast Track Michi's Diary: www.tpi-j.co.jp/diary/index.html

イラスト／ソリマチアキラ